日本医史学雑誌　第57巻第1号（2011）　19–37

19世紀における臨床医学書の進化

坂井　建雄

順天堂大学医学部　解剖学・生体構造科学

受付：平成22年8月24日／受理：平成23年1月7日

要旨：18世紀終盤から19世紀末に欧米で刊行された臨床医学書50著作を，構成と内容の違いによって時期の異なる4型に分けることができた．第1期の疾病分類型では，羅列的な分類項目に分けられ，扱われる疾病項目は症候に相当した．第2期の折衷型では，疾病分類学的な疾病項目と，局所的疾病が含まれていた．第3期の器官系統型では，器官系別に配置された局所的疾病が中心であった．第4期の感染症重視型では，感染症に続いて局所的疾病が器官系別に配置されていた．これら4型の臨床医学書は，病理解剖を含むパリ学派の活動，ドイツの大学での研究室医学，病原菌の発見などの19世紀の臨床医学の変革を背景に進化した．日本が西欧の近代医学を導入する際に，これら4型の臨床医学書を背景とする医学が時期を異にして日本に到来して影響を与えた．

キーワード：臨床医学書，疾病分類学，パリ学派，研究室医学，病原菌の発見

臨床医学書には，疾病の種類とその診断法・治療法についての情報が記述されている．フェルネル Fernel, Jean Francois（1497–1558）の『医学 Medicina』（1554）やブールハーフェ Boerhaave, Herman（1668–1738）の『医学教程 Institutiones medicae』（1708）から今日のハリソン Harrison, Tinsley Randolph の『内科学原理 Principles of internal medicine』（1950）に至るまで，医学の歴史において数多くの臨床医学書が書かれてきた．これらの臨床医学書ではさまざまな疾病項目が扱われているが，それらの名称や概念は，時代により地域により実に多様である．疾病の原因についての判断や治療についての方策も，きわめて多様である．古代の臨床医学書に見られる疾病概念で，現代に通用するものはほとんどない．

疾病についての考え方が，19世紀に大きく変化したことは良く知られている．古代のヒポクラテス Hippocrates（BC460–BC370）とガレノス Galen（129–216）以来の体液病理学説は，18世紀まで影響力を保っていたが，病理解剖学の影響によって19世紀に入ると固体病理学説が受け入れられるようになった[1]．18世紀末から19世紀初頭にかけては疾病分類学がトレンドとなり疾病を実体のある存在として存在論的に捉えたが，19世紀には疾病を正常からの逸脱として生理学的に捉えるよう主張された[2]．また流行病の原因がコンタギオン（伝染）によるものかミアズマ（瘴気）によるものかという議論が戦わされ，病原菌が発見される19世紀終盤まで続いた[3]．これとほぼ同時期に，医学のありようも大きく変化した．その変化は病床医学 bedside medicine から病院医学 hospital medicine へ，さらに研究室医学 laboratory medicine へと捉えられる[4]．

本稿では，医学の変動期にあたる19世紀とその前後に出版された臨床医学書を調査し，疾病分類学の影響を強く受けた18世紀末の臨床医学書が，20世紀初頭の近代的な臨床医学書へと変貌していく過程を明らかにする．さらにこの臨床医学書の進化過程と，日本の近代医学の成立期との関わりについても考察する．

対象とした臨床医学書の範囲

19世紀とその前後の時期にヨーロッパとアメリカで出版された臨床医学書を，米国国立医学図

書館のオンライン目録[5]，グーグルブックスの検索[6]，ABEブックスの検索[7]を用いて探索し，該当する書目をダウンロードないし購入して内容と構成を調査した．調査する医学書の時期については，疾病分類学の嚆矢となるソヴァージュ Sauvages, François Boissier, de Lacroix（1706–1767）の『方式的疾病分類学 Nosologia methodica』（1763）以後で19世紀末までに初版が出版されたものとしたが，その前後の臨床医学書も必要に応じて参照した．調査する医学書の類型としては，個別の疾病が列挙されその診断や治療について記述されている各論的で包括的な臨床医学書を対象とした．特定の疾病のみを扱う各論的で個別的な臨床医学書，個別の疾病については触れずに病気の原因などを一般的に述べる総論的な臨床医学書，病理解剖所見について述べる病理学書は，調査の対象から除外した．対象とした著作は48人の著者による50著作で，なるべく初期の版を用いた．

調査対象の50著作の使用言語（翻訳書の場合には原著作の使用言語）は，ラテン語が7著作，英語が11著作，フランス語が7著作，ドイツ語が25著作であった．初版の刊行時期を見ると，1800年までが11著作，1801～1820年が7著作，1821～1840年が9著作，1841～1860年が11著作，1861～1880年が6著作，1881～1900年が6著作であった．

これらの50著作の内容と構成を分析したところ，刊行時期によって大まかに区分される4つの類型を区別することができた．疾病分類学型，折衷型，器官系統型，感染症重視型である．第1期の疾病分類型は1760年代から1840年代まで21著作，第2期の折衷型は1830年頃から1870年頃まで12著作，第3期の器官系統型は1840年頃から1890年頃まで10著作，第4期の感染症重視型は1880年頃以降で1900年まで2著作（その後1930年頃までに3著作）があった．これらの型に分類されない局所的な構成を含む臨床医学書が5著作存在した．

第1期，疾病分類学型の臨床医学書

第1期の臨床医学書には，疾病分類学の著作およびそれに類似した構成と内容をもつ著作が含まれる．疾病分類学では，あらゆる疾病に名前を付けて区別し，体系的な分類を行っている．疾病分類学の出発点となったソヴァージュの『方式的疾病分類学』（Sauvages, 1763）では，疾病を10の綱に分類し，さらに43の目と295の属に分類し，総計2,308の病気の種を記述した[8]．10の綱は1）瑕疵（皮膚の症候），2）熱病，3）炎症，4）痙攣，5）呼吸病，6）衰弱，7）疼痛，8）狂妄，9）流出，10）悪液質である．分類項目は羅列的であって，解剖学的ないし生理学的な関連性はない．また疾病項目のほとんどは今日的な意味での疾病ではなく，症候に相当するものである．第1期の疾病分類型の臨床医学書では，ソヴァージュの採用したこのような分類項目や疾病項目の多くが採用された．

疾病分類学型の臨床医学書の例として，コンラディ Conradi, Johann Wilhelm Heinrich（1780–1861）の『病理学と治療基礎 Grundriß der Pathologie und Therapie』を取り上げる．コンラディはマールブルクに生まれ，マールブルクで医学を学んで1802に学位を得た．1803年に員外教授，1805年に正教授になった．1814年にハイデルベルク大学の教授と大学病院院長になった．1823年にゲッティンゲン大学に移り，1853年まで教授と病院長を務めた．医師，教師および病院長として優秀であり，多数の著作を残している[9]．『病理学と治療基礎』を1811年に出版し，その第1部は「一般病理学」，第2部は「特殊病理学と治療」である．この著作は改訂を重ね，第3版からは両者が独立して前者は『一般病理学提要 Handbuch der allgemeinen Pathologie』（1822）となって，後者は『特殊病理学と治療提要 Handbuch der speciellen Pathologie und Therapie』（1826–1828）となった．両者ともに第6版（1841）まで版を重ね，オランダ語訳も出版されている．オランダ語版は江戸時代の日本にもたらされ，シーボルトの弟子の児玉順三（1806–1861）により『公氏医宗玉海』全3冊（1860）として翻訳出版されている．

『病理学と治療基礎』第2版（Conradi, 1817–1820）は，全2部3冊からなり，判型が19×12センチ，第1部の「一般病理学」は506頁で，『一

般病理学基礎』の別表題を持つ．内容は疾病一般，疾病の相違一般（一般疾病分類学），病因論，症候学の 4 部に分かれている．第 2 部の「特殊病理学と治療」は第 1 巻が 859 頁，第 2 巻は 796 頁で，『特殊病理学と治療基礎』の別表題を持つ．内容は 10 綱に分かれており，発熱，炎症，発疹，異常な流出，悪液質，寄生性疾病，痙縮性疾病，感覚の抑圧と無力，内部感覚と共通感覚の異常，感覚の亢進と変調を扱っている．疾病項目の具体的な例として，第 4 綱の異常な流出を見ると，この綱は 2 節に分けられ，第 1 節の血液の流出では，出血一般に続いて，鼻出血，口腔出血，喀血，吐血，痔，血尿，月経，月経の欠乏の 8 項目が扱われ，第 2 節の他の流出では，下痢，乳糜下痢，不消化下痢，赤痢，コレラ，尿崩症，尿保持の不能，白帯下，精液漏，尿閉の 10 項目が扱われる．このようにコンラディの『病理学と治療基礎』で扱われる疾病項目のほとんどは症候であるが，その一部は全身的疾病と見なすこともできる．（表 1）

疾病分類学型の臨床医学書として，21 著作を確認することができた．

- ソヴァージュ Sauvages, François Boissier, de Lacroix（1706–1767）『方式的疾病分類学 Nosologia methodica』（Sauvages, 1763）
- フォーゲル Vogel, Rudolph Augustin（1724–1774）『人体病変の認識と治療の学術講義 Academicae praelectiones de cognoscendis et curandis praecipuis corporis humani affectibus』（Vogel, 1772）
- カレン Cullen, William（1710–1790）『方式的疾病分類学概要 Synopsis nosologiae methodicae』（Cullen, 1780; 初版 1772）
- カレン Cullen, William（1710–1790）『医学実地第一線 First lines of the practice of physic』（Cullen, 1792; 初版 1778–1779）
- ゼレ Selle, Christian Gottlieb（1748–1800）『臨床

表 1　コンラディ『病理学と治療基礎』（1817–1820）第 2 部「特殊病理学と治療基礎」

第 1 綱	発熱について Von den Fiebern	I: 1–163
第 2 綱	炎症について Von den Entzündungen	I: 164–575
第 3 綱	発疹について Von den Hautausschlägen	I: 576–840
第 4 綱	異常な流出について Von den abnormen Ausleerungen	
第 1 節	血液流出と流出すべき血液の抑制ないし抑圧について Von den Blutflüssen und der Zurückhaltung oder Unterdrückung des auszuleerenden Blutes	II: 1–170
第 2 節	腹部流出と他の病的排出と流出 Von den Bauchflüssen und anderen krankhaften Ab= und Aussonderungen	II: 171–274
第 5 綱	悪液質 Kachexien	II: 275–478
第 6 綱	寄生動物の形成を伴う疾病 Krankheiten mit Bildung parasitischer Thiere	II: 479–496
第 7 綱	痙縮性疾病 Krampfhafte Krankheiten	
第 1 節	植物的生命の器官において In den Organen des vegetativen Lebens	II: 497–565
第 2 節	とくに随意運動のための筋肉において　In den zur willkürlichen Bewegung bestimmten Muskeln hervorstechend	II: 566–605
第 8 綱	感覚器と神経の抑圧ないし無力を伴う疾病 Krankheiten mit Unterdrückung oder Schwäche der Kräfte des Empfindungswergzeuges und der Nerven verbunden sind（Adynamiae, Eclyses）	II: 606–669
第 9 綱	内部感覚の異常と共通感覚の亢進と変調を伴う疾病 Kranhkeiten mit Abnormitäten der inneren Sinne und Erhöhung oder Verstimmung der Gemeingefüles	II: 670–750
第 10 綱	感覚の亢進と変調で特徴づけられる疾病 Krankheiten durch Erhöhung oder Verstimmung der Empfindungen sich auszeichnend（Hyperaesthesiae et Pseudaesthesiae）	
第 1 目	外部感覚に関する Die äußeren Sinne betreffend	II: 751–756
第 2 目	疼痛性疾病 Schmerzhafte Krankheiten（Dolores）	II: 757–781

医学 Medicina clinica』（Selle, 1789; 初版 1781）

- ウェブスター Webster, Charles（1750–1795）『実地医学体系 Medicinae praxeos systema』（Webster, 1781）
- フランク Frank, Johann Peter（1745–1821）『人の病気の治療綱要 De curandis hominum morbis epitome』（Frank, 1816–1817; 初版 1792）
- ピネル Pinel, Philippe（1745–1826）『哲学的疾病記述論 Nosographie philosophique』（Pinel, 1797）
- トマス Thomas, Robert（1753–1835）『近代医療実地 The modern practice of physic』（Thomas, 1802; 初版 1801）
- ピネル Pinel, Philippe（1745–1826）『臨床医学 La médecine clinique』（Pinel, 1804; 初版 1802）
- クラーク Clarke, Edward Goodman（1811年没）『近代医療実地 The modern practice of physic』（Clarke, 1805）
- ホーフェン Hoven, Friedrich Wilhelm von（1759–1838）『実用医術提要 Handbuch der praktischen Heilkunde』（Hoven, 1805）
- フーパー Hooper, Robert（1773–1835）『医師必携 Physician's vade mecum』（Hooper, 1823; 初版 1809）
- コンラディ Conradi, Johann Wilhelm Heinrich（1780–1861）『病理学と治療基礎 Grundriß der Pathologie und Therapie』（Conradi, 1817–1820; 初版 1811）
- ライマン Raimann, Johann Nepomuk von（1780–1847）『特殊医学病理学と治療提要 Handbuch der speciellen medicinischen Pathologie und Therapie』（Raimann, 1832; 初版 1816）
- シューラン Choulant, Johann Ludwig（1791–1861）『人体の特殊病理学と治療教科書 Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie des Menschen』（Choulant, 1831）
- ノイマン Neumann, Karl Georg（1774–1850）『人間の病気について，各論 Von den Krankheiten des Menschen. Specieller Theil oder Specielle Pathologie und Therapie』（Neumann, 1836–1838; 初版 1832–1834）
- シェーンライン Schönlein, Johann Lukas（1793–1864）『一般特殊病理学と治療 Allgemeine und spezielle Pathologie und Therapie』（Schönlein, 1834; 初版 1832）
- バウムゲルトナー Baumgärtner, Karl Heinrich（1798–1886）『特殊疾病治療学提要 Handbuch der speciellen Krankheits- und Heilungslehre』（Baumgärtner, 1835）
- フーフェラント Hufeland, Christoph Wilhelm（1762–1836）『医学必携 Enchiridion medicum』（Hufeland, 1837; 初版 1836）
- ポスナー Posner, Louis（1815–1868）『特殊病理学と治療提要 Handbuch der speciellen Pathologie und Therapie』（Posner, 1845–1847）

刊行時期では，1760年代から1840年代まで80年以上にわたり，ヨーロッパ各国で出版されている．ラテン語によるものが6著作（ソヴァージュ，フォーゲル，カレン，ウェブスター，フランク），フランス語によるものが2著作（ピネルの2著作），英語によるものが4著作（カレン，トマス，クラーク，フーパー），ドイツ語によるものが10著作（ゼレ，ホーフェン，コンラディ，ライマン，シューラン，ノイマン，シェーンライン，バウムゲルトナー，フーフェラント，ポスナー）であった．

この時期に疾病分類学型ではない臨床医学書もいくつか出版されている．フランスのリュート Lieutaud, Joseph（1703–1780）による『医学一般実地概要 Synopsis universae praxeos medicae』（1770）全2巻は，部位別に構成されており，自身が行った病理解剖の経験が反映されている[10]．イタリアのブルセリウス Burserius, Joannes Baptista（1725–1785）の『医学実地教程 Institutionem medicinae practicae』（1782–1791）全8巻は，第1～4巻は疾病分類学的な内容を有するが，第5～8巻は部位別に構成されている[11]．ブルセリウスはモルガーニ Morgagni, Giovanni Battista（1682–1771）の弟子であり，その病理解剖学からの影響がある．ドイツのビーレフェルトの医師コンスブルッフ Consbruch, Georg Wilhelm Christoph（1764–1837）が著した『実地医のための臨床携要 Klinisches Taschenbuch für

practische Ärzte』（1794–1795）全2巻は，第1巻では熱病を扱い，第2巻では局所的で器官系統的な構成をもつ[12]．内容的には小項目の多くが症候であって，疾病分類学的な臨床医学書の異型と見ることができる．

第2期，折衷型の臨床医学書

第2期の折衷型の臨床医学書は，疾病分類学的な疾病項目と局所的な疾病項目の両方を含んでいるのが特徴である．

折衷型の臨床医学書の例として，カンシュタット Canstatt, Karl Friedrich（1807–1850）の『特殊病理学と治療 Die specielle Pathologie und Therapie vom klinischen Standpunkte』全4巻を取り上げる．カンシュタットはレーゲンスブルクに生まれ，ウィーンとヴュルツブルクで医学を学び，1831年に学位を得た．1832年にコレラについて学ぶためにパリに留学し，その後ブリュッセルで病院に勤務し，再びレーゲンスブルクに戻って眼科で開業し，眼科学や内科学の著作を出版するようになった．1843年に前任者の死去によりエアランゲン大学の病理学教授に就任したが，1846年に肺結核を発症して健康状態が悪化し，1850年に死去した．短い生涯の間に精力的に執筆を行っている[13]．1841年に『特殊病理学と治療』全4巻の刊行を始めた．カンシュタット自身の改訂により第2版が出版され，没後にヘノッホの改訂により第3版が出されている．オランダ語訳が出版されている．オランダ語版が江戸時代の日本にもたらされて，坪井信良（1823–1904）により翻訳され『侃斯達篤内科書』として1864［元治元］年に出版されている．

『特殊病理学と治療』（Canstatt, 1843–1847）は全4巻からなり，判型が22×14センチ，内容は3部に分かれている．第1部の疾病の基本的諸形態では，器官の肥大と萎縮，多血と貧血，鬱血と充血，炎症，水腫，気腫，発熱など，それまでの疾病分類学で疾病項目として扱われていたものを，疾病の基礎となる要素と位置づけなおして，本来の疾病から区別している．第2部の特異的疾病過程は2綱を含み，第1綱の急性外因性疾病は特異的発疹過程，マラリア伝染病，チフス，気候性疾病，動物毒症，慢性伝染病の6目の中に86疾病を含んでおり，第2綱の体質性悪液質には壊血病，痛風，クル病などの8疾病を含んでいる．第3部の各論的局所病理学は，頭部，脊髄，末梢神経，呼吸器，心臓，動脈と静脈，消化器，泌尿器，生殖器，腹膜，外皮それぞれの疾病を扱う11綱に分かれている．（表2）

カンシュタットの『特殊病理学と治療』の構成は，疾病分類学の疾病項目に含まれていた症候を疾病の基本要素として第1部で扱い，全身的な疾病については第2部で扱うようにしたものである．また器官や局部の疾病を新たに加えて第3部で扱っている．第3部の各論的局所病理学における各部の疾病の扱いは，この時代の器官の生理学が未熟であったことを反映して，概念的な水準に留まっている．たとえば肝臓と胆嚢の疾病では，肥大，萎縮，炎症，出血，脂肪症，同形成，異形成，結核，結石，寄生虫，軟化，疼痛の12項目が挙げられているが，その多くは他の器官の疾病（例えば胃，腸，腎臓など）で挙げられる項目と共通である．すなわち各器官の疾病項目には，臓器に固有の病態生理の特徴が反映されていない[14]．

疾病分類学の疾病概念を残しながらも局所的な疾病も加えた折衷型の臨床医学書として，12著作を確認することができた．

- グレゴリー Gregory, George（1790–1853）『医療の理論と実地概論 Elements of the theory and practice of physic』（Gregory, 1831; 初版 1828）
- マッキントッシュ Mackintosh, John（d. 1837）『病理学の原理と医療の実地 Principles of pathology, and practice of physic』（Mackintosh, 1837; 初版 1831）
- カンシュタット Canstatt, Karl Friedrich（1807–1850）『臨床的視点からの特殊病理学と治療 Die specielle Pathologie und Therapie vom klinischen Standpunkte』（Canstatt, 1843–1847; 初版 1841–1842）
- ヴンダーリヒ Wunderlich, Carl Reinhold August（1818–1877）『病理学治療提要 Handbuch der Pathologie und Therapie』（Wunderlich, 1846–1854;

表2 カンシュタット『特殊病理学と治療』（1843–1847）

第1部	疾病の基本的諸形態 Elementarformen der Krankheit	I: 1–310
第2部	特異的疾病過程 Specifische Krankheitsprocesse	
第1綱	急性外因性疾病 Acute kosmische Krankheiten	II: 15–975
第2綱	体質性悪液質 Constitutionelle Dyskrasien	II: 975–1098
第3部	各論的局所病理学 Specielle Localpathologie	
第1綱	頭部の疾病 Krankheiten des Kopfs	IIIa: 1–194
第2綱	脊髄の疾病 Krankheiten des Rückenmarks	IIIa: 195–280
第3綱	個々の神経と神経領域の局所病理学 Topographische Pathologie einzelner Nerven und Nervengebiete	IIIa: 281–448
第4綱	気道の疾病 Krankheiten der Luftwege	IIIb: 1–458
第5綱	循環器の疾病 Krankheiten der Kreislaufsorgane	IV: 3–192
第6綱	動脈と静脈の疾病 Krankheiten der Arterien und Venen	IV: 193–262
第7綱	乳糜産生系の疾病 Krankheiten des chylopoötischen Systems	IV: 263–748
第8綱	尿産生系の疾病 Krankheiten des uropoëtischen Systems	IV: 749–872
第9綱	生殖系の疾病 Krankheiten des Genitallensystems	IV: 873–980
第10綱	腹膜の疾病 Krankheiten des Bauchfells	IV: 981–1025
第11綱	外皮の疾病 Krankheiten der äusseren Haut	IV: 1026–1145

Wunderlich, 1852–1856）

- ヒューベナー Hübener, Ernst August Ludwig（生没年不詳）『特殊病理学と治療 Specielle Pathologie und Therapie』（Hübener, 1850–1852）
- ヴンダーリヒ Wunderlich, Carl Reinhold August（1818–1877）『特殊病理学と治療基礎 Grundriss der speciellen Pathologie und Therapie』（Wunderlich, 1858）
- タナー Tanner, Thomas Hawkes（1824–1871）『医学実地提要 A manual of the practice of medicine』（Tanner, 1864; 初版 1854）
- ハウシュカ Hauschka, Dominik Joseph（1815–1899）『特殊病理学と治療概要 Compendium der speciellen Pathologie und Therapie』（Hauschka, 1855–1857）
- レーベルト Lebert, Hermann（1813–1878）『実用医学提要 Handbuch der praktischen Medicine』（Lebert, 1863; 初版 1855）
- キッセル Kissel, Carl（生没年不詳）の『特殊病理学と治療提要 Handbuch der speciellen Pathologie und Therapie』（Kissel, 1863）
- ハーツホールン Hartshorne, Henry（1823–1897）『医学の原理と実践要説 Essentials of the principles and practice of medicine』（Hartshorne, 1867）
- ジャクー Jaccoud, Sigismond（1830–1913）『内部病理学概論 Traité de pathologie interne』（Jaccoud, 1870–1871）

刊行時期では，1830年頃から1870年頃まで40年ほどにわたり，イギリスとドイツを中心に出版されている．英語によるものが4著作（グレゴリー，マッキントッシュ，タナー，ハーツホールン），ドイツ語によるものが7著作（カンシュタット，ヴンダーリヒの2著作，ヒューベナー，ハウシュカ，レーベルト，キッセル），フランス語によるものが1著作（ジャクー）であった．

折衷型の臨床医学書が登場し始める前後に，局所的な構成を持つ臨床医学書をフランスのアンドラル Andral, Gabriel（1797–1876）が出版している．『医学臨床 Clinique médicale』（1823）全5巻は，部位別の構成になっている[15]．『内部病理学講義 Cours de pathologie interne』（1836）全3巻は，器官系統別の構成である[16]．この時期のフランスの医師たちは病理解剖を活発に行っており，アンドラルの局所的な構成の臨床医学書は，そこから生まれたものである．

折衷型の臨床医学書において，疾病分類学的な部分と局所的疾病の部分の組合せ方は，著者によ

り様々である．グレゴリーの『医療の理論と実地概論』（Gregory, 1831）では内容が2部に分かれ，第1部の急性疾病では熱や発疹などの疾病分類学的な疾病項目を扱い，第2部の慢性疾病は局所的な疾病を扱っている．マッキントッシュの『病理学の原理と医療の実地』（Mackintosh, 1837）では内容が9部に分かれ，第1部が熱について，第2～8部が局所的な疾病を器官系に分けて扱い，第9部がリウマチを扱っている．ヴンダーリヒの『病理学治療提要』第2版（Wunderlich, 1852–1856）は4巻に分かれており，第1巻では総論，第2巻では病理組織学，第3巻では局所的な疾病，第4巻では全身性の疾病を扱っている．ヒューベナーの『特殊病理学と治療』（Hübener, 1850–1852）は，症候を扱う総論と，局所的な疾病を扱う各論とに分かれている．タナーの『医学実地提要』（Tanner, 1864）は内容が12部に分かれ，第1部は全身的な疾病，第2部は熱を扱い，第3～12部では局所的な疾病を扱っている．ハウシュカの『特殊病理学と治療概要』全2巻（Hauschka, 1855–1857）では第1巻が総論で熱，慢性悪液質，慢性中毒を扱い，第2巻が各論で局所的な疾病を器官系別に扱っている．レーベルトの『実用医学提要』（Lebert, 1863）は2部に分かれ，第1部では全般的な疾病として伝染病や中毒を扱い，第2部では局所的な疾病を器官系別に扱っている．キッセルの『特殊病理学と治療提要』（Kissel, 1863）は，総論と各論からなり，各論は10書に分かれて外因性，全身性に続いて器官系別の疾病を扱っている．ハーツホールンの『医学の原理と実践要説』（Hartshorne, 1867）は2部に分かれ，第1部の総論では症候，治療，疾病分類学などを扱い，第2部の各論では局所的な疾病を器官系別に扱っている．ジャクーの『内部病理学概論』（Jaccoud, 1870–1871）は内容が3部に分かれており，第1部は症候を扱い，第2部は局所的な疾病を扱い，第3部は全身的な疾病を扱っている．

第3期，器官系統型の臨床医学書

第3期の器官系統型の臨床医学書では，疾病分類学的な疾病項目は実質的に消えて，局所的な疾病項目が主体となっていること，局所的な疾病項目が部位別ではなく，器官系統別に配列されているのが特徴である．

器官系統型の臨床医学書の例として，ニーマイヤー Niemeyer, Felix（1820–1871）の『特殊病理学と治療教科書 Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie』全2巻（1858–1861）を取り上げる．ニーマイヤーは1820年にマグデブルクに生まれ，1839年から1843年までハレ大学で医学を学んだ．卒業後は同大学で助手を務め，プラハとウィーンに留学した．1844年に郷里に戻って無料施療医を務め，1848年に友人たちとマグデブルク医学協会を設立した．1855年にグライフスヴァルト大学の内科学の正教授になり，1860年にチュービンゲン大学教授に招かれた[17]．1858年に刊行を始めた『特殊病理学と治療教科書』全2巻は，内科学の標準的な教科書として広く受け入れられて1879年の第10版まで改訂を続けた．国際的にも広まって英語版，フランス語版，スペイン語版，ハンガリー語版，ロシア語版，トルコ語版が出されている．明治維新後にわが国に輸入されて東京大学医学部を始め各地の医学校での医学教育に用いられた．また佐藤尚中は，ニーマイヤー『特殊病理学と治療教科書』のオランダ語訳本から日本語訳を行い，呼吸器・循環器・消化器の疾病の部分を『済衆録』全14巻（1879–1882）として出版している．

『特殊病理学と治療教科書』（Niemeyer, 1858–1861）は全2巻からなり，判型が23×14センチ，2巻がそれぞれ2部に分かれ，第1巻第1部では呼吸器，循環器の疾病を扱い，第2部では消化器，肝臓・胆道の疾病を扱い，第2巻第1部では泌尿器，生殖器，神経系の疾病を扱い，第2巻第2部では皮膚，運動器の疾病と体質性疾病を扱う．全体として器官系別の取り扱いを原則としており，そこに当てはまらない全身的な疾病を体質性疾病としてまとめて末尾に置いている．第2期までの臨床医学書に見られた，症候についての記述はもはや見られない．（表3）

体質性疾病の項目は3節に分かれ，第1節の急性感染性疾病では麻疹，猩紅熱，天然痘，コレラ，

表3　ニーマイヤー『特殊病理学と治療教科書』（1858–1861）

第1巻，第1部	
呼吸器の疾病 Krankheiten der Respirations-Organe	1–233
循環器の疾病 Krankheiten der Circulations-Organe	234–352
第1巻，第2部	
消化器の疾病 Krankheiten der Digestions-Organe	353–586
肝臓と胆道の疾病 Krankheiten der Leber und der Gallenwege	587–697
第2巻，第1部	
泌尿器の疾病 Krankheiten der Harnorgane	1–80
生殖器の疾病 Krankheiten der Geschlechtsorgane	
男性生殖器の疾病 Krankheiten der männlichen Geschlechtsorgane	81–89
女性生殖器の疾病 Krankheiten der weiblichen Geschlechtsorgane	90–136
神経系の疾病 Krankheiten des Nervensystems	137–370
第2巻，第2部	
皮膚の疾病 Krankheiten der Haut	371–457
運動器の疾病 Krankheiten der Bewegungs-Organe	458–509
体質性疾病 Constitutionelle Krankheiten	510–766

赤痢など12章を含み，第2節の慢性感染性疾病では梅毒など3章を含み，第3節の全般的栄養異常では萎黄病，壊血病，血友病，糖尿病など6章を含んでいる．扱われる体質性疾病の種類は，カンシュタット『特殊病理学と治療』の3分の1以下に縮小されている．器官別疾病の扱いについては，機能系別の分類が徹底されていて，9項目が立てられている．各器官の疾病の中で扱われる疾病についても，器官に特有の病態生理を踏まえた実質的な扱いがなされている．たとえば循環系の疾病では，心臓の疾病の項目の中に，心臓の弁障害という項目があり，4種類の弁それぞれについて不全と狭窄が扱われている．運動器の疾病の項目の中にリウマチ，痛風，骨軟化症などが含まれるが，これらは第2期の臨床医学書では体質性疾病に含められていたものである．

器官系統型の臨床医学書では，疾病分類学の時代から引きずってきた疾病概念が背景に退き，局所的な疾病が前面に押し出されている．局所的な疾病の配列は，部位別ではなく器官系統別になっている．そのような器官系統型の臨床医学書として，10著作を確認することができた．

・ダングリソン Dunglison, Robley（1798–1869）『医学の実地，特殊病理学と治療の論考 The practice of medicine: A treatise on special pathology and therapeutics』（Dunglison, 1848; 初版1842）
・リヒテル Richter, Hermann Eberhard Friederich（1808–1876）『内部臨床基礎 Grundriss der inneren Klinik』（Richter, 1855–1856）
・ニーマイヤー Niemeyer, Felix（1820–1871）『特殊病理学と治療教科書 Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie』（Niemeyer, 1858）
・クンツェ Kunze, Carl Ferdinand（1826–1889）『実用医学概論 Compendium der practischen Medicin』（Kunze, 1863）
・バーソロー Bartholow, Roberts（1831–1904）『医学実地論考 A treatise on the practice of medicine』（Bartholow, 1889; 初版1880）
・デュラフォイ Dieulafoy, Georges（1839–1911）『内部病理学提要 Manuel de pathologie interne』（Dieulafoy, 1880）
・アイヒホルスト Eichhorst, Hermann（1849–1921）『特殊病理学と治療提要 Handbuch der speciellen Pathologie und Therapie』（Eichhorst, 1895; 初版1885）
・ドルンブリュート Dornblüth, Otto（1860–1922）『内科学概論 Kompendium der inneren Medizin』（Dornblüth, 1895; 初版1892）
・シュヴァルベ Schwalbe, Julius（1863–1930）『特

殊病理学と治療基礎』（Schwalbe, 1898; 初版1892）

・コレ Collet, Frédéric Justin（1870–1966）『内部病理学概論 Précis de pathologie interne』（Collet, 1901; 初版1899）

刊行時期では1840年頃から1890年頃まで約50年にわたり，英語によるものが2著作（ダングリソン，バーソロー），ドイツ語によるものが6著作（リヒテル，ニーマイヤー，クンツェ，アイヒホルスト，ドルンブリュート，シュワルベ），フランス語によるものが2著作（デュラフォイ，コレ）であった．

器官系統型の臨床医学書として上に掲げたもののうち最初の2著作は，形式の上では器官系統型になっているが，内容的には疾病分類学的な要素を残しており，むしろ折衷型に近いものである．ダングリソンの『医学の実地，特殊病理学と治療の論考』（Dunglison, 1848）では最後の第9書で複数の器官を巻き込む疾病を扱い，ここに熱，発疹，悪液質などの疾病分類学的な項目を扱っている．リヒテルの『内部臨床基礎』（Richter, 1855–1856）では，第1部の血管系の疾病の中に，熱，悪液質などの疾病分類学的な項目を扱っている．第3期の器官系統型の臨床医学書は，ニーマイヤーの『特殊病理学と治療教科書』から実質的に始まったと考えるべきである．

第4期，感染症重視型の臨床医学書

第3期の器官系統別の臨床医学書では，局所的な疾病が前面に押し出され，感染症を含む全身的な疾病項目は後回しにされていた．第4期の感染症重視型の臨床医学書では，冒頭に感染症がまとめて扱われ，その後で器官系別に局所的な疾病項目が列挙される．

この時期の感染症重視型の臨床医学書の例として，シュトゥリュンペル Strümpell, Ernst Adolf Gustav Gottfried von（1853–1925）の『内科疾病の特殊病理学と治療教科書 Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie der inneren Krankheiten』（1883）を取り上げる．シュトゥリュンペルはクアランド（現在のリトアニア）に生まれ，エストニアのドルパトで成長した．プラハ大学に入学して1870年から医学を学び始めたが，1872年に父親のライプツィヒ赴任に伴って同地の大学に移った．臨床医学のヴンダーリヒ，生理学のルートヴィヒらの下で医学を学び，1875年に卒業して助手として大学で務めた．1878年に教授資格を得て，1883年に員外教授となった．1886年にエアランゲン大学の正教授，1903年にブレスラウ大学，1909年にウィーン大学に移り，1915年にライプツィヒ大学に戻って学長を務めた[18]．主著の『内科疾病の特殊病理学と治療教科書』（1883）は，発刊当初から評価の高い臨床医学書で，1934年の第32版まで改訂を続け，英語訳，フランス語訳，ポルトガル語訳，ロシア語訳が出版されている．日本では保利聯と舟岡英之助の訳により『斯氏内科全書』全5巻（1895–1901）として出版されている．

『内科疾病の特殊病理学と治療教科書』第3版（Strümpell, 1886）は，全2巻からなり，判型が22×15センチ，内容は急性全般性感染疾病，呼吸器の疾病，循環器の疾病，消化器の疾病，末梢神経の疾病，血管運動性と栄養性神経症，脊髄の疾病，延髄の疾病，脳の疾病，既知の解剖学的基礎のない神経症，泌尿器の疾病，運動器の疾病，血液と物質代謝の異常，という13項目を含んでいる[19]．器官系別の取り扱いが基本になっているという点で，ニーマイヤーの『特殊病理学と治療教科書』の構成を踏襲しているが，いくつかの点で変更されている．最も重要な変更は，それまで体質性疾病としてまとめられていたものの一部を急性全般性感染疾病として冒頭に置き，残りを血液と物質代謝の異常として別項目としたことである．神経系疾病の割合が相対的に増え，末梢神経では体性神経と自律神経の疾病，中枢神経では脊髄，延髄，脳の疾病，さらに脳機能の疾病が区別されている．（表4）

感染症重視型の臨床医学書では，冒頭に感染症がまとめて扱われ，その後で器官系別に局所の疾病が列挙される．そのような感染症重視型の臨床医学書として，1900年までに2著作，それ以後で

表4 シュトゥリュンペル『内科疾病の特殊病理学と治療教科書』（1886）

第1巻	
急性全般性感染疾病 Acute allgemeine Infectionskrankheiten	1–178
呼吸器の疾病 Krankheiten der Respirationsorgane	179–416
循環器の疾病 Krankheiten der Circulationsorgane	417–518
消化器の疾病 Krankheiten der Digestionsorgane	519–782
第2巻，第1分冊	
末梢神経の疾病 Die Krankheiten der peripherischen Nerven	1–126
血管運動性と栄養性神経症 Vasomotorische und trophische Neurosen	127–144
脊髄の疾病 Die Krankheiten des Rückenmarks	145–278
延髄の疾病 Die Krankheiten des verlängerten Marks	279–298
脳の疾病 Die Krankheiten des Gehirns	299–419
既知の解剖学的基礎のない神経症 Neurosen ohne bekannte anatomische Grundlage	420–495
第2巻，第2分冊	
泌尿器の疾病 Krankheiten der Harnorgane	1–128
運動器の疾病 Krankheiten der Bewegungsorgane	129–174
血液と物質代謝の異常（体質性疾病）Anomalien des Blutes und des Stoffwechsels（Constitutionskrankheilten）	175–298

1930年代までに3著作を確認することができた．

- シュトゥリュンペル Strümpell, Ernst Adolf Gustav Gottfried von（1853–1925）『内科疾病の特殊病理学と治療教科書 Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie der inneren Krankheiten』（Strümpell, 1886; Strümpell, 1900; 初版 1883）
- オスラー Osler, William（1849–1919）『医学の原理と実地 The principles and practice of medicine』（Osler, 1892）
- メリング Mering, Josef von（1849–1908）『内科学教科書 Lehrbuch der inneren Medizin』（Mering, 1903; 初版 1901）
- セシル Cecil, Russell L.（1881–1965）『医学教科書 A textbook of medicine』（Cecil, 1937; 初版 1927）
- マサー Musser, John H.（1883–1947）『内科学，その理論と実地 Internal medicine. Its theory and practice』（Musser, 1932）

刊行時期では1883年から1932年まで50年ほどにわたり，英語によるものが3著作（オスラー，セシル，マサー），ドイツ語によるものが2著作（シュトゥリュンペル，メリング）であった．

臨床医学書の4型とその背景

19世紀に交替して登場した4型の臨床医学書は，その構成において大きな違いがあるが，内容的にはそれ以前の臨床医学書を元に発展してきたものである．4型の臨床医学書に含まれる疾病項目の関係を，第1期のコンラディ『病理学と治療基礎』（1817–1820），第2期のカンシュタット『特殊病理学と治療』（1843–1847），第3期のニーマイヤー『特殊病理学と治療教科書』（1858–1861），シュトゥリュンペル『内科疾病の特殊病理学と治療教科書』を例にとって示す．（図1）

第1期の疾病分類型では，扱われている疾病項目は原則として症候であり，その一部は全身性疾病と見なしうる．第2期の折衷型では，疾病分類型の疾病項目は症候と全身性疾病が区別されて扱われ，局所的な疾病項目が新たに加わっている．第3期の器官系統型では，局所的な疾病を器官系毎に扱い，それらに並ぶ体質性疾病の項目で全身性疾病を扱う．熱や炎症といった症候はもはや扱われない．第4期の感染症重視型では，全身性疾病のうち感染症が冒頭で扱われ，それに続いて局所的な疾病が器官系毎に扱われる．全身性疾病のうち感染症以外のものも疾病項目の一つと

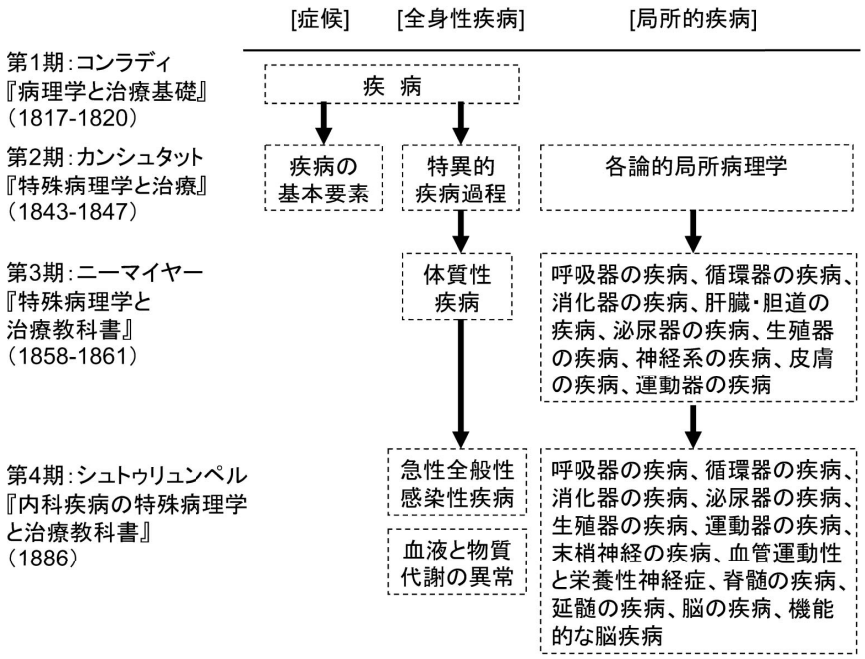

図1　第 1 期～第 4 期の臨床医学書における疾病項目の関係を示す模式図.

して扱われる.

18 世紀後半から 19 世紀にかけて，構成と内容の異なる 4 型の臨床医学書が次々と交替して現れた．それ以前にもそれ以後にも，このような臨床医学書の型の交替は知られていない．16 世紀のフェルネル Fernel, Jean Francois（1497–1558）の『医学 Medicina』（Fernel, 1554）は，生理学と病理学を含んでいて，正常な働きの逸脱により病気が起こるという生理学的な疾病概念を保持していたが，同様の生理学病理学型の医学書は，18 世紀にもなお出版されている．20 世紀の臨床医学書においては，器官系統別の疾病項目が中心になっているが，総論や全身性の疾病をどのように加えるかについて，著者の個性が強く表れていて，時代による変化は見出しにくい．19 世紀は，体液病理学説に基づいた古代以来の疾病概念と決別する一方で，器官の生理機能を明らかにし，病原菌を発見して疾病の原因を具体的に突き止め，近代的な疾病概念を築き上げる過渡的な時代である．その疾病概念の進化の過程が，臨床医学書の 4 型に投影されている.

古代以来の体液病理学説のもとでは，疾病の原因は体液の均衡からの逸脱に求められていた．16 世紀のヴェサリウスによる近代解剖学の始まりや，17 世紀のハーヴィーによる血液循環論によって古代の学説の権威は失われたが，体液病理学説そのものは 18 世紀まで影響力を持ち続けた．18 世紀前半のブールハーフェ Boerhaave, Herman（1668–1738）の『医学教程 Institutiones medicae』（Boerhaave, 1708），シュタール Stahl, Georg Ernst（1660–1734）の『真正医学理論 Theoria medica vera』（Stahl, 1737; 初版 1708），ホフマン Hoffmann, Friedrich（1660–1742）の『系統的理性的医学 Medicinae rationalis systematicae』（Hoffmann, 1739; 初版 1718）では，生理学と病理学の項目を含んでいる．これら生理学病理学型の臨床医学書を，疾病分類学以前の第 0 期と呼ぶことにする．その構成は正常からの逸脱により疾病が起こるとするもので，その疾病概念は生理学的である.

ソヴァージュの『方式的疾病分類学』（1763）から始まる疾病分類学では，植物分類学と同様に，疾病に個別の種として名前を付け体系的に分類しようとした．しかしその分類項目には解剖学的・生理学的な関連性がなく羅列的であり，疾病

項目としては症候がおもに扱われていた．こういった特徴を有するのが第1期の疾病分類型の臨床医学書であり，疾病を個別の存在として認めるという意味で，その疾病概念は存在論的である．

近代の病理解剖学はモルガーニ Morgagni, Giovanni Battista（1682–1771）の『解剖によって明らかにされた病気の座および原因 De sedibus et causis morborum per anatomen』（1761）によって始まり，18世紀終盤にはフランス，イギリス，オランダなど各国で病理解剖が行われるようになった．革命後のフランスではとくに病理解剖が活発に行われた．その初期の中心的な人物のビシャ Bichat, Marie Francois Xavier（1771–1802）は，臨床医学の著作を残すことなく夭折してしまった．疾病分類学の疾病概念に対して強烈な批判を行ったのは，ビシャの弟子のブルッセー Broussais, François Joseph Victor（1772–1836）である．ブルッセーは革命下の健康学校で医学を学び，ナポレオン軍の軍医となり，その後，軍病院に勤めて研究を行った．『一般に認められている医学学説の吟味 Examen de la doctrine médicale généralement adoptée』（1816）でピネルの学説を強く批判し，第2版（1821）と第3版（1829–1834）では，ピネル以後の医師たちをも批判の対象とした．ブルッセーの学説の要点は，正常な器官に病変が生じることによって病気が起こるとするもので「生理学的医学」と称した．疾病分類学は疾病を虚構の存在として扱っていると否定された．疾病分類学で熱として一括されていたものをピネルは本態性熱病と呼んでいたが，それらをブルッセーは胃腸を中心とする局所の炎症で説明しようとした[20]．ブルッセーの学説は大きな反響を巻き起こしたが，1830年代にはいるとブルッセーのようなイデオロギーの主張を排して，病理解剖と数値的な方法に基づいて病気を探求しようとする医師たちが登場した．折衷主義者と呼ばれる人たちである．その中でもアンドラルは病理解剖を基礎にして人気の高い臨床医学書をいくつも出版している．『医学臨床 Clinique médicale』（1823），『内部病理学講義』（Andral, 1836）などいずれも局所的な疾病を中心に扱い，疾病分類学の疾病概念を完全に切り捨てた臨床医学書である．こういったフランスでの新しい医学の影響のもとに，第2期の折衷型の臨床医学書が生まれた．実際，カンシュタットとヴンダーリヒは，1830年代にパリに留学して，フランスでの新しい医学の動向を直接体験していた．

第2期の折衷型の臨床医学書は，疾病分類学的な疾病項目と局所的な疾病項目とが，さまざまな形で併存しているのが特徴である．疾病分類学的な疾病項目では，体液病理学説の影響下にある存在論的な疾病概念が含まれているが，局所的な疾病項目では，病理解剖学によって始まった固体病理学説の影響下で器官の機能の異常として疾病を捉える生理学的な疾病概念が含まれている．折衷型の臨床医学書における局所的な疾病項目は，部位別に配列される場合もあれば，器官系統別に配列される場合もある．

19世紀中葉以降にドイツでは研究室での実験的な研究が発展した．その中心となった人物として，ミュラーとルートヴィヒの名がしばしば挙げられる．ミュラー Müller, Johannes Peter（1801–1858）はベルリン大学の生理学教授で，ヘンレ Henle, Friedrich Gustav Jacob（1809–1885），ブリュッケ Brücke, Ernst Wilhelm Ritter（1819–1892），ヘルムホルツ Helmholtz, Hermann von（1821–1894），デュボア・レイモン Du Bois-Reymond, Emil（1818–1896），フィルヒョウ Virchow, Rudolf Carl（1821–1902）など次代の医学を支える多様な弟子を排出し，主著の『人体生理学提要 Handbuch der Physiologie des Menschen』全2巻（Müller, 1838, 1840）は，生理学の古典として名高く，大きな影響力を持った．ルートヴィヒ Ludwig, Carl Friedrich Wilhelm（1816–1895）はライプツィヒ大学の生理学教授で，ロシアのパヴロフ Pavlov, Ivan Petrovich（1849–1936），イギリスのスターリング Stirling, William（1851–1932），フィンランドのティーゲルシュテット Tiegerstedt, Robert（1853–1923）など外国から多数の研究者を集めて育て，各国に生理学の研究を広めた[21]．第3期の器官系統的な臨床医学書は，このような研究室の生理学的な研究の発展を背景に登場した．

第 3 期の器官系統型の臨床医学書では，第 2 期までの著作に見られた疾病分類学的な疾病項目が消えて，局所的な疾病項目を中心に構成されている．また第 2 期までの臨床医学書では，局所的な疾病項目はしばしば頭・胸・腹といった部位別に配列されていたが，第 3 期では消化器・循環器・呼吸器といった器官系別に配列されている．この器官系別の構成は，疾病を器官の機能の異常と見なす生理学的な疾病概念を反映している．

19 世紀の後半には微生物学の研究においても大きな発展があった．パストゥール Pasteur, Louis（1822–1895）は，空気中の微生物によって腐敗が起こることを巧妙な実験によって示し，自然発生説を決定的に否定した（1861 年）．さらに炭疽菌の純粋培養とワクチンの開発に成功した（1881 年）．コッホ Koch, Heinrich Hermann Robert（1843–1910）は細菌培養の技術を開発し，1882 年に結核菌，1883 年にコレラ菌を発見してその後の細菌学研究に大きな途を開いた[22]．伝染病の原因については，何らかの病原体の伝染（コンタギオン）によるという説と腐敗性の瘴気（ミアズマ）によるという説が古くからあり，19 世紀に入っても決着をみないでいたが，病原菌の発見はこの論争に決着をつけるものであった．経験的に始められていた外科手術における消毒・滅菌法の有効性が裏付けられるとともに，ワクチン療法や化学療法剤など病原菌に対抗する治療法が開発されて，人類に大きな恩恵をもたらすこととなった．このような背景から生み出されたのが第 4 期の感染症重視型の臨床医学書である．

第 4 期の感染症重視型の臨床医学書では，感染症が最初に扱われる重要な疾病項目となり，それに続いて局所的な疾病項目が器官系別に配列されている．感染症は病原菌との関連が明確で，個別的な疾病と見なされ，その疾病概念は存在論的である．これに対し疾病の器官系別の扱いでは，器官の正常な機能の変調により疾病が起こると想定され，その疾病概念は生理学的である．

19 世紀とその前後における臨床医学書の変動期は，体液病理学説から固体病理学説への移行期に位置している．この間に疾病分類学の登場，病理解剖学による器官の病変への注目，研究室での生理学研究による器官の機能の理解，病原菌の発見などを契機として，疾病についての考え方は大きく変化した．臨床医学書もそれに合わせて 4 段階を経て進化してきた．これらの臨床医学書に含まれる疾病概念も，存在論的と生理学的の間で揺れ動いたが，疾病の種類により存在論的なものと生理学的なものが併存する形に落ち着いた．（図 2）

臨床医学書の進化と日本の医学との関係

日本の医学は江戸時代中葉まで漢方を中心とし

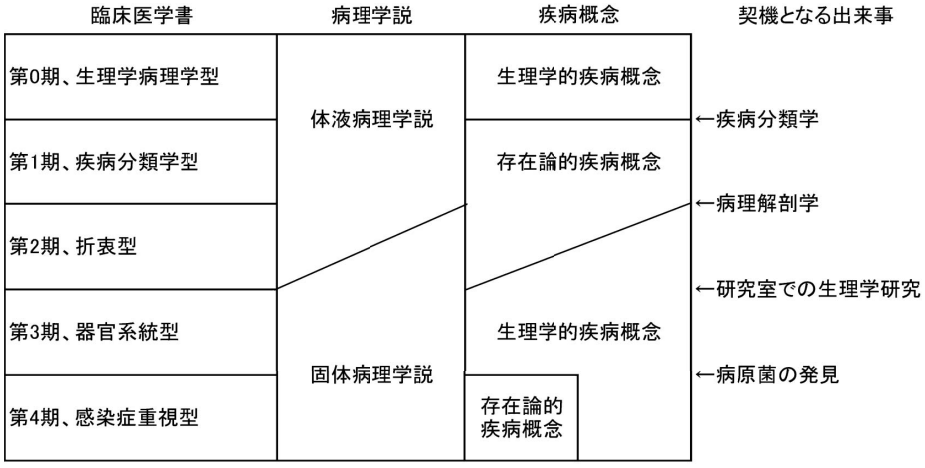

図 2　第 0 期から第 5 期までの臨床医学書と，病理学説，疾病概念との関係，および契機となった出来事との関係を示す模式図．

た伝統医学であったが，1774［安永3］年の『解体新書』を契機として，おもにオランダ語の医学書を通してヨーロッパの医学が紹介されるようになった．その後，江戸時代後期から明治初期にかけてヨーロッパの医師が日本に滞在し，西洋医学を日本人に直接教えるようになった．

日本に滞在して西洋医学を伝えた最初の人物は，シーボルト Siebold, Philipp Franz von（1796–1866）である．シーボルトは1815年から1820年までヴュルツブルクで医学を学び，1823年にオランダ東インド会社の日本商館付医員として日本にやってきた．長崎の出島で勤務したほか，長崎郊外に鳴滝塾を開いて高野長英（1804–1850），伊藤玄朴（1801–1871），二宮敬作（1804–1862）らに医学を教えた．しかし帰国直前に国外持ち出し禁止の日本地図などを所持していたことが見つかり，関係した日本人が処刑されシーボルトも翌年に国外追放処分となる．このシーボルト事件のために記録が残されず，シーボルトが日本で行った医学教育の実態については不明である[23]．しかしシーボルトがヴュルツブルクで医学教育を受けた年代から考えて，その学んだ医学は第1期の疾病分類学的なものであったと推定される．またシーボルトの弟子の児玉順蔵は，第1期のコンラディの臨床医学書を翻訳して『公氏医宗玉海』全3冊（1860）として出版している．児玉順蔵が何故この著作を選んで翻訳出版したのかは不明であるが，シーボルトを通じてこの著作を教えられていた可能性が推測される．

江戸幕府は1854［安政元］年に日米和親条約を締結して開国に方針を転じ，1855［安政2］年に長崎に海軍伝習所を設置して西洋の科学や医学を積極的に取り入れた．そこで医学を教えたのがポンペ Pompe van Meerdervoort, Johannes L.C.（1829–1908）である．ポンペは1845年から1849年までユトレヒト陸軍軍医学校で医学を学び，1857［安政4］年に来日して1862［文久2］年まで長崎に滞在し多くの日本人に医学を教えた．ポンペの門下からは，塾長を務めた松本良順，司馬凌海，長与専齊，佐藤尚中，佐々木東洋ら明治の医学を築いた医師たちが多数育っていった[24]．ポンペの講義ノートは内科学を含めていくつか残されているが，内科学の講義内容についてはまだ調査が行われていない．ポンペがユトレヒトで医学教育を受けた年代から考えて，その医学は第2期の折衷型であった可能性が高い．またカンシュタットの『臨床的視点からの特殊病理学と治療』のオランダ語版が1843–1846年に刊行されているので，日本滞在までの時期に，この最新の臨床医学書に親しむ機会は十分にあったはずである．

明治政府は，東京大学にドイツ人医師を招いて医学教育を委ねることにした．そこで医学を教えたのが，ミュラー（ミュルレル）Müller, Benjamin Carl Leopold（1824–1893）とホフマン Hoffmann, Theodor Eduard（1837–1894）およびそれに続くドイツ人教師たちである．とくにベルツ Bälz, Erwin von（1849–1913）は1876［明治9］年から1905［明治38］年まで在日29年におよび，日本の医学界の発展に尽くした．ベルツは1868年にチュービンゲン大学医学部に入学し，ライプツィヒ大学に移って1872年に卒業し，ヴンダーリヒ教授の助手を務めた[25]．ベルツが受けた医学教育を受けた時期には，すでに第3期のニーマイヤーの『特殊病理学と治療教科書』が第8版（1871）まで刊行されており，器官系統型の臨床解剖学書は広まっていた．ところがベルツが東京大学で行った内科学の授業の講義ノートの日本語訳（ベルツ , 1889–1890），およびベルツの執筆した臨床医学書の日本語訳（ベルツ , 1902–1903）は，いずれも第2期の折衷的なスタイルのものであった．ベルツを教えたヴンダーリヒは，第2期の折衷的なスタイルの臨床医学書を出版しており，ベルツがライプツィヒでそのような折衷的な疾病概念の医学を学んだ可能性が高い[26]．その一方で，第3期の器官系統型の代表格であるニーマイヤーの臨床医学書は，1878［明治11］年の時点で東京大学医学部に多数所蔵され，また石川県甲種医学校で使われていた[27]．明治初期の日本の医学教育には，第3期の器官系統型の臨床医学書が持ち込まれていた．

1877［明治10］年頃から日本の公立医学校は急増して30校に達するが，明治政府の方針変更により1887［明治20］年には淘汰され，5校が官

立の高等中学校医学部として，3校が公立医学校として存続する．これらの医学校には，東京大学医学部の卒業生が教員として赴任し，ドイツ人教師から教わった高度な医学を全国に広めた[28]．第4期の感染症重視型の代表格であるシュトゥリュンペルの『内科疾病の特殊病理学と治療教科書』の初期の版は，現在でも全国の医学校に収蔵されている[29]．またこの著作の日本語訳が『斯氏内科全書』全5巻（1895–1901）として出版されている．第4期の臨床医学書は，ドイツから10年ほどの時間差で日本に広がりを見せることになった．

まとめと結語

19世紀とその前後の期間のヨーロッパの医学書の内容と構成を調査して，交替して現れた4つの型があることを明らかにした．第1期の疾病分類学的な臨床医学書は，体液生理学説がなお強い影響力を持っていた1760年代のソヴァージュによる疾病分類学の影響によって始まり，1830年代まで存続した．第2期の折衷的な臨床医学書は，パリ学派の病理解剖学とブルッセーによる疾病分類学批判の影響によって始まり，1870年頃まで存続した．第3期の器官系統的な臨床医学書は，19世紀中葉のドイツの研究室の生理学研究の影響によって始まり，19世紀末まで存続した．第4期の感染症重視型の臨床医学書は，1880年代の病原菌の発見の影響によって始まり，1930年代まで存続した．

19世紀は臨床医学がとくに大きく変動した時代である．体液病理学説から固体病理学説への移り変わりに加えて，生理学的疾病概念と存在論的疾病概念の対立が絡み合って，この時期の疾病概念の推移は単純ではない．

我が国の近代医学は，このような医学の激動の時代にヨーロッパからもたらされた．シーボルト，ポンペ，ドイツ人教師，そして東京大学医学部の卒業生たちと，医学教育の担い手は変わっていったが，それぞれが我が国に持ち込み広めた医学も単一のものではなく，時代とともに第1期の疾病分類学的なものから第4期の感染症重視型のものまで変遷していた．

以上のように，19世紀の臨床医学書に時期による4つの型を区別することにより，19世紀における臨床医学の進化を明確に示すことができた．また日本の近代医学とヨーロッパの医学の対応関係についても有用な手がかりを得ることができた．

註

1）体液病理学説から固体病理学説への移り変わりについては，Ackerknecht（1955）pp. 162–172〔邦訳：アッカークネヒト（1983）pp. 193–205〕，Meyer-Steineg and Sudhoff（2006）pp. 315–317〔邦訳：マイヤー・シュタイネック；ズートホフ（1982）pp. 314–316〕，川喜田（1977）pp. 606–618を参照．

2）存在論的疾病概念と生理学的疾病概念については，Bynum（1993），González-Crussi（2007）pp. 133–154〔邦訳：ゴンザレス・クルッシ（2008）pp. 189–216〕を参照．

3）コンタギオン説とミアズマ説の論争については，川喜田（1977）pp. 885–889を参照．

4）病宅医学，病院医学，研究室医学については，Brunton, D（2004）pp. 1–30を参照．

5）URL: http://www.ncbi.nlm.nih.gov/sites/entrez?db=nlmcatalog.

6）URL: http://books.google.co.jp/advanced_book_search.

7）URL: http://www.abebooks.com/.

8）ソヴァージュの『方式的疾病分類学』の内容とその後の影響については，坂井（2010a）を参照．

9）コンラディの伝記については，Hirsch（1884–1888）のConradiの項を参照．

10）リュートの『医学一般実地概要』（Lieutaud, 1770）は，第1巻が疾病，第2巻が治療薬を扱う．第1巻は3書に分かれ，第1書は内部の疾病についてで，全身性，頭部，胸部，腹部の疾病を扱い，第2書は外部の疾病についてで，全身性，頭部，体幹と体肢，皮膚の疾病を扱い，第3書は女性と小児の疾病を扱う．

11）ブルセリウスの『医学実地教程』（Burserius, 1782–1791）は，第1・2巻で熱，第3・4巻で発疹，第5・6巻で頭部の疾病，第7巻で胸部の疾病，第8巻で腹部の疾病を扱っている．

12）コンスブルッフの『実地医のため臨床携要』（Consbruch, 1808–1809）の第1巻では，疾病と治療の総論に続いて，熱病の総論と各論（単純熱，複合熱）を扱う．第2巻は10綱に分かれて1）神経系，2）血液系，3）リンパ系，4）粘液分泌器，5）皮膚，6）呼吸器，7）消化・栄養器，8）胆汁器，9）泌尿器，10）生殖器の異常を扱い，その後に小児の疾病，外的原因による突然の危険の項目がある．

13）カンシュタットの伝記については，Hirsch（1884–1888）のCanstattの項を参照．

14）たとえばそれぞれの臓器の炎症の項目の中には胃

炎，腸炎，肝炎，膵炎，腎炎などがある．同様に出血の項目の中には胃出血，腸出血，肝出血，血尿があり，同形成の項目の中には胃硬化，肝硬変があり，異形成の項目の中に胃癌，腸癌，膵癌，肝癌，腎癌が含まれる．

15）アンドラルの『医学臨床』（Andral, 1834; 初版 1823）全5巻は，第1・2巻が腹部の疾病についてで，1）消化管の疾病，2）肝臓とその付属装置の疾病，3）腹膜炎の観察を扱い，第3・4巻が胸部の疾病についてで，1）心臓の疾病，2）肺の疾病を扱い，第5巻が脳の疾病についてで，1）脳髄膜の疾病，2）脳の疾病，3）小脳の疾病を扱う．

16）アンドラルの『内部病理学講義』（Andral, 1836）全3巻は，第1巻が3書に分かれ，第1書は消化管についてで，1）消化管の横隔膜下部，2）消化管の横隔膜上部，3）口，4）舌の疾病を扱い，第2書は循環器についてで，1）血液循環器，2）リンパ器の疾病を扱い，第3書は呼吸器についてで，1）喉頭，2）気管と気管支，3）肺実質の疾病を扱う．第2巻は分泌器についてで，1）蒸散器，2）漿膜，3）分泌腺器の疾病を扱う．第3巻は関係の生命の器官についてで，1）中枢神経の疾病，2）死体病変のない中枢神経の疾病，3）生殖器の疾病を扱う．

17）ニーマイヤーの伝記については，Hirsch（1884–1888）の Canstatt の項を参照．

18）シュトゥリュンペルの伝記については，Erbguth and Neundörfer（2000）を参照．

19）シュトゥリュンペル『内科疾病の特殊病理学と治療教科書』第13版（Strümpell, 1900）では，項目の順序が入れ替わっており，急性全般性感染疾病，呼吸器の疾病，循環器の疾病，消化器の疾病，末梢神経の疾病，血管運動性と栄養性神経症，脊髄の疾病，延髄の疾病，脳の疾病，既知の解剖学的基礎のない神経症，泌尿器の疾病，運動器の疾病，血液と物質代謝の異常，となっている．第13版の項目順の方がより自然である．第3版（Strümpell, 1886）の項目順は，初版で第2巻第2部が遅れて刊行された事情を反映していると思われる．

20）ブルッセーの学説については，Ackerknecht（1967）pp. 61–82〔邦訳：アッカークネヒト（1978）pp. 103–137〕を参照．

21）ミュラーとルートヴィヒを始めとするドイツの生理学研究については，Rothschuh（1953）pp. 112–161，Rothschuh（1973）pp. 195–263 を参照．

22）病原菌の発見に至る経緯については，Meyer-Steineg and Sudhoff（2006）pp. 318–320〔邦訳：マイヤー・シュタイネック；ズートホフ（1982）pp. 317–319〕，川喜田（1977, pp. 876–902）を参照．

23）シーボルトの生涯およびその医学については，シーボルト（2006），石田（1988）pp. 53–120 を参照．

24）ポンペの生涯およびその医学については，宮永（1985），石田（1988）pp. 325–328 を参照．

25）ベルツの生涯およびその医学については，安井（1995）を参照．

26）ヴンダーリヒの臨床医学書については，坂井（2010b）を参照．

27）東京大学医学部創立百年記念会（1967）pp. 657–698，および板垣（2009）を参照．

28）明治期の医学校の変遷と東京大学医学部卒の教師については，坂井（2008），吉良（2010）を参照．

29）国立情報学研究所の Webcat Plus（URL: http://webcatplus.nii.ac.jp/）による検索で，東北大学医学部（当時は第二高等中学校医学部），金沢大学医学部（当時は第四高等中学校医学部），大阪大学医学部（当時は公立の大阪医学校），京都府立医科大学（当時は京都医学校），名古屋大学医学部（当時は愛知医学校）での所蔵が確認された．

一次文献

Andral, G: Clinique médicale, ou choix d'observations recueillies a l'Hôpital de la Charité (clinique de M. Lerminier). 3rd ed., in 5 vols., Paris, Deville Cavellin, 1834

Andral, G: Cours de pathologie interne professé à la Faculté de médecine de Paris: professé à la Faculté de médecine de Paris. Paris, Librairie des Sciences Médicales, 1836

Bartholow, R: A treatise on the practice of medicine for the use of students and practitioners of medicine. 6th ed., New York: D. Appleton and company, 1889

Baumgärtner, KH: Handbuch der speciellen Krankheits- und Heilungslehre : mit besonderer Rüksicht auf die Physiologie. in 2 vols., Stuttgart: L.F. Rieger, 1835

Boerhaave, H: Institutiones medicae, in usus annuae exercitationis domesticos, digestae ab Hermanno Boerhaave. Linden: Johannem vander, 1708

Burserius, JB: Institutionem medicinae practicae quas auditoribus suis praelegebat. in 8 vols., Venetiis: Apud Josephum Orlandelli, 1782–1791

Canstatt, C: Die specielle Pathologie und Therapie vom klinischen Standpunkte. 2nd ed., 4 vols in 6., Erlangen: Ferdinand Enke, 1843–1847

Cecil, RL: A textbook of medicine. Saunders, Philadelphia, 4th ed., 1937

Choulant, L: Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie des Menschen. Ein Grundriss der praktischen Medicine für akademische Vorlesungen. Leipzig: Leopold Voss, 1831

Clarke, EG: The modern practice of physic. London: Longman, Hurst, Rees, and Orme, 1805

Collet, FC: Précis de pathologie interne. 2nd ed., in 2 vols., Paris: Doin, 1901

Conradi, JWH: Grundriß der Pathologie und Therapie zum Gebrauche bey seinen Vorlesungen entworfen. 2nd ed., 2

parts. in 3, Marburg: Johann Christian Krieger, 1817–1820
Consbruch, GW: Klinisches Taschenbuch für practische Ärzte. 5th ed., in 2 vols., Leipzig: Johann Ambrosius Barth, 1808–1809
Cullen, W: Synopsis nosologiae methodicae, exhibens claris. virorum Sauvagesii, Linnaei, Vogelii, Sagari systemata nosologica. in 2 vols., 3rd ed., Edinburgh: Gulielmum Creech, 1780
Cullen, W: First lines of the practice of physic. in 2 vols., Dublin: William Jones, 1792
Dieulafoy, G: Manuel de pathologie interne. 2 vols in 3, Paris: Masson, 1880
Dornblüth, O: Kompendium der inneren Medizin für Studierende und Ärtzte. 2nd ed., Leipzig: Veit & Comp. 1895
Dunglison, R: The practice of medicine: A treatise on special pathology and therapeutics. 3rd ed., in 2 vols., Philadelphia: Lea and Blanchard, 1848
Eichhorst, H: Handbuch der speciellen Pathologie und Therapie für praktische Ärzte und Studirende. 5th ed., in 4 vols., Wien, Urban & Schwarzenberg, 1895
Fernel, JF: Medicina. Paris: Andream Wechelum, 1554
Frank, JP: De curandis hominum morbis epitome praelectionibus academicis dicata. in 8 vols., Venetiis: Josephi Molinari, 1816–1817
Gregory, G: Elements of the theory and practice of physic. in 2 vols., Philadelphia, Towar, J. & D.M. Hogan, 1831
Hartshorne, H: Essentials of the principles and practice of medicine. A handbook for students and practitioners. Philadelphia: Henry C. Lea, 1867
Hauschuka, DJ: Compendium der speciellen Pathologie und Therapie, als Leitfaden für seine Vorlesungen. in 2 vols., Wien: Braumüller, 1855–1857
Hoffmann, F: La médecine raisonnée de Mr Fr. Hoffmann. Premier Médecin du Roi de Prusse, etc, in 9 vols., Paris: Briasson, 1739
Hooper, R: The physician's vade mecum: containing the symptoms, causes, diagnosis,, prognosis, and treatment of diseases. London: Renshaw and Rush et al., 1823
Hoven, FWv: Handbuch der praktischen Heilkunde. in 2 vols., Heilbronn am Neckar: Johann Kankel Claß, 1805
Hübener, EAL: Specielle Pathologie und Therapie. Erlangen: Enke, 1850–1852
Hufeland, CW: Enchiridion medicum oder Anleitung zur medizinischen Praxis. 3rd ed., Berlin: Jonas, 1837
Jaccoud, S: Traité de pathologie interne. in 3 vols., Paris : A. Delahaye, 1870–1871
Kissel, C: Handbuch der speciellen Pathologie und Therapie. in 2 vols., Erlangen: Enke, 1863
Kunze, CF: Compendium der practischen Medicin. Erlangen: Ferdinand Enke, 1863
Lebert, H: Handbuch der praktischen Medicine. in 2 vols., Tübingen: H. Laupp, 1863
Lieutaud, J: Synopsis universae praxeos medicae, in binas partes divisa; quarum prior omnium morborum conspectum exhibet; alter vero rem medicamentariam, perpectuis commentariis illustratam, sistit; cui subjungitur Liber de Cibo et Potu. in 2 vols., Parisiis: P. Fr. Didot, 1770
Mackintosh, J: Principles of pathology, and practice of physic. 2nd American ed., in 2 vols., Philadelphia: Edward C. Biddle, 1837
Mering, Jv: Lehrbuch der Inneren Medizin. 2nd ed., Gustav Fischer, Jena, 1903
Musser, JH (ed): Internal medicine. Its theory and practice in contributions by American authors. Lea & Febiger, Philadelphia, 1932
Neumann, KG: Von den Krankheiten des Menschen. Specieller Theil oder Specielle Pathologie und Therapie. 2nd ed., in 4 vols., Berlin: Friedr. Aug. Herbig, 1836–1838
Niemeyer, F: Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie mit besonderer Rücksicht auf Physiologie und pathologische Anatomie. in 2 vols., August Hirschwald, Berlin, 1858–1861
Osler, W: The principles and practice of medicine designed for the use of practitioners and students of medicine. New York: D. Appleton and Company, 1892
Pinel, P: Nosographie philosophique ou La méthode de l'analyse appliquée à la médecine. in 2 vols., Paris: Hachette, 1797
Pinel, P: La médecine clinique rendue plus précise et plus exacte par l'application de l'analyse, ou Recueil et résultat d'observations sur les maladies aiguës, faites à la Salpêtrière. 2nd ed., Paris : J.-A. Brosson, 1804
Posner, L: Handbuch der speciellen Pathologie und Therapie. in 3 vols., Leipzig: F.A. Brockhaus; 1845–1847
Raimann, JNv: Handbuch der speciellen medicinischen Pathologie und Therapie, für akademische Vorlesungen. 4th ed., in 2 vols., Stuttgart, G. F. Wolters, 1832
Richter HE: Grundriss der inneren Klinik für akademische Vorlesungen und und zum Selbststudium. 3rd ed., in 2 vols., Leipzig: Leopold Voss, 1855–1856
Sauvages, FB: Nosologia methodica sistens morborum classes, genera et species, juxta Sydenhami mentem et Botanicorum ordinem. in 3 vols., Amsterdam: Frères De Tournes, 1763
Schönlein, JL: Allgemeine und spezielle Pathologie und Therapie. nach J.L. Schönlein's Vorlesungen. Nieder geschrieben und herausgegeben von einem seiner Zuhörer. in 4 vols., Herisau: Literatur-Comptoir, 1834
Schwalbe, J: Grundriss der speciellen Pathologie und Therapie mit besonderer Berücksichtigung der Diagnostik. 2nd ed., Stuttgart, Ferdinand Enke, 1898
Selle, CG: Medicina clinica oder Handbuch der medicinischen

Praxis. 5th ed., Berlin: Christian Friedrich Himburg, 1789
Stahl, GE: Theoria medica vera, physiologiam et pathologiam tanquam doctrinae mediciae partes vere contemplativas, e naturae et artis veris fundamentis intaminata ratione et inconcussa experientia sistens. Editio altera correctior, Ioan. Iunckeri, 1737
Strümpell, A: Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie der inneren Krankheiten für Studirende und Aerzte. 3rd ed., 2 vols. in 3, Leipzig: F.C.W. Vogel, 1886
Strümpell, A: Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie der inneren Krankheiten für Studirende und Aerzte. 13th ed., in 3 vols., Leipzig: F.C.W. Vogel, 1900
Tanner, TH: A manual of the practice of medicine. Philadelphia: Lindsay & Blakiston, 1864
Thomas R: The modern practice of physic, which points out the characters, causes, symptoms, prognostic, morbid appearances, and improved method of treating the diseases of all climates. in 2 vols., London: Murray and Highley, 1802
Vogel, RA: Academicae praelectiones de cognoscendis et curandis praecipuis corporis humani affectibus. Gottingae: Viduam Abr. Vandenhoeck, 1772
Webster, C: Medicinae praxeos systema, ex Academiae Edinburgenae disputationibus inauguralibus praecipue depromptum, et secundum naturae ordinem digestum. in 3 vols., Edinburgi: Gulielmum Gordon et Robertum Murray, 1781
Wunderlich, CRA: Handbuch der Pathologie und Therapie. 3 vols. in 4, Stuttgart: Ebner & Seubert, 1846–1854
Wunderlich, CRA: Handbuch der Pathologie und Therapie. 2nd ed., 4 vols. in 6, Stuttgart: Ebner & Seubert, 1852–1856
Wunderlich, CRA: Grundriss der speciellen Pathologie und Therapie. Stuttgart: Ebner & Seubert, 1858
ベルツ（伊勢錠五郎 訳）：内科病論．全3巻，東京：伊勢錠五郎，1889–1890
ベルツ（馬島永徳；本堂恒次郎；土岐文二郎 訳）：鼈氏内科学．全3巻6冊，東京：金原医籍，1902–1903

二次文献

Ackerknecht, EH: A short history of medicine. New York, NY: Roland Press, 1955
Ackerknechit, EH: Medicine at the Paris hospital 1794–1848. Baltimore: Johns Hopkins Press, 1967
Brunton, D (ed): Medicine transformed — health, disease and society in Europe 1800–1930. Manchester: Manchester University Press, 2004
Bynum, WF: Nosology. In: Companion encyclopedia of the history of medicine. Bynum, WF; Porter, R (eds). London: Routledge, 1993. pp. 335–356
Erbguth FJ; Neundörfer B: Adolf Strümpell (1853–1925). J Neurol. 2000; 247: 575–576
González-Crussi, F: A short history of medicine. New York, NY: Modern Library, 2007
Hirsch, A: Biographisches Lexikon der hervorragenden Aerzte aller Zeiten und Völker. in 6 vols., Wien & Leipzig: Urban & Schwarzenberg, 1884–1888
Meyer-Steineg, T; Sudhoff, K: Illustrierte Geschichte der Medizin von der Vorzeit bis zur Neuzeit. Paderborn: Voltmedia, 2006
Rothschuh, KE: Geschichte der Physiologie. Berlin: Springer Verlag, 1953
Rothschuh, KE: History of physiology. Huntington, NY: Krieger Publishing, 1973
アッカークネヒト（舘野之男 訳）『パリ病院 1794–1848』東京：思索社，1978
アッカークネヒト（井上清恒；田中満智子 訳）：世界医療史―魔法医学から科学的医学へ．東京：内田老鶴圃，1983
石田純郎：蘭学の背景．京都：思文閣出版，1988
板垣英治：石川県甲種医学校の医学教育：医学教科書と参考書から医学教育を見る．日本海域研究．2009; 40: 91–103
川喜田愛郎：近代医学の史的基盤．全2巻，東京：岩波書店，1977
吉良枝郎：明治期におけるドイツ医学の受容と普及―東京大学医学部外史．東京：築地書館，2010
ゴンザレス・クルッシ（堤理華 訳）：医学が歩んだ道．東京：ランダムハウス講談社，2008
坂井建雄：我が国の近代解剖学教育の成立過程．解剖学雑誌．2008; 83: 105–116
坂井建雄：ソヴァージュ（一七〇六～一七六七）の疾病分類学．医譚．2010a; 91: 109–123
坂井建雄：ヴンダーリヒ（一八一五～一八七七）の臨床医学．医譚．2010b; 92: 66–90
シーボルト（酒井幸子 訳）：シーボルト，波乱の生涯．東京：どうぶつ社，2006
東京大学医学部創立百年記念会 編：東京大学医学部百年史．東京：東京大学出版会，1967
マイヤー・シュタイネック；ズートホフ（小川鼎三 監訳）：図説医学史．東京：朝倉書店，1982
宮永孝：ポンペ―日本近代医学の父．東京：筑摩書房，1985
安井広：ベルツの生涯―近代医学導入の父．京都：思文閣出版，1995

The Evolution of Clinical Medical Books in the 19th Century

Tatsuo SAKAI

Juntendo University, Faculty of Medicine, Department of Anatomy and Life Structure

Fifty clinical medical books written in the late 18th and the 19th centuries were categorized into four alternating types on the basis of the differences in composition and contents. The nosological type in the first period classified diseases into taxa, and dealt symptoms as diseases. The eclectic type in the second period contained both categories of nosological diseases and those of local diseases. The organ system type in the third period focused on the local diseases arranged in a systematic manner. The infection emphasis type put the infectious diseases at the beginning, followed by the local diseases in a systematic manner. The four types of clinical medical books evolved in accordance with the changes in clinical medicine in the 19th century, exemplified by the activities of the Parisian school, including those regarding pathological anatomy, laboratory medicine in the German universities, and discovery of pathogenic bacteria. When Western medicine was introduced in Japan, different stages of medicine, representing the four types, arrived at different times.

Key words: Clinical medical books, nosology, Parisian school of medicine, laboratory medicine, discovery of pathogenic bacteria